

および骨髓からの出現速度の遅速によって示されねばならないと考える。したがって単に赤血球利用率 level を云々するだけでなく利用率曲線を解析し出現速度を求ることを提唱したい。

*

111. Rauscher 白血病における Zn 代謝について（第1報）

高橋 功 喜多島康一 斎藤公男
石崎雅信 長尾忠美
(岡山大学 平木内科)

今回われわれは白血病における Zn 代謝を解明する一端とし Rauscher 白血病マウス、正常マウスの Zn 含有量、⁶⁵Zn 放射活性を測定し若干の知見をえたので報告する。まず、両群肝、脾の Zn 量を原子吸光光度計を用いて測定した。脾では白血病群(R.L群) 2.0~2.2 μg/100mg、正常群 (N 群) 3.6~5.5 μg/100mg と白血病脾において著減を認めた。肝では R.L 群 2.5~352 μg/100mg、N 群 3.0~3.7 μg/100mg であった。また脾/肝値を各個体において比較検討するに R.L 群 1.0 以下、N 群 1.0 以上と両群各個体間に著明な相異を認め、白血病における Zn 分布状態は正常と異なることを示した。次に virus 接種後経時に肝脾 Zn 量を測定したが、脾では接種後第 1 週ですでに約 1/2 に減少し第 4 週目白血病が発症するまでにつづき以後は前白血病期に比し軽度上昇を示した。一方肝においては第 4, 5 週目にいたり軽度減少を示した。また ⁶⁵Zn-glycine complex 0.02ml (⁶⁵Zn 0.6 μCi) マウス背部皮下に接種しその放射活性を測定した。whole body における ⁶⁵Zn 残存率は、7 日目まで R.L 群に高値を示した。単位重量当りの脾 ⁶⁵Zn 値は R.L 群が第 3 日目、7 日目において有意に高値を示し、肝では、N 群、R.L 群とも類似の傾向を示した。また、両群肝脾の経時的相関をみると N 群では肝、脾類似の減少傾向を示すが、R.L 群では、第 3 日目に両群曲線は近接を示した。次に、各個体における脾 ⁶⁵Zn 値、肝 ⁶⁵Zn 値の比率を経時にみると N 群では第 1.3.7 日目平均 62%, 68%, 47% と平坦な曲線を描くが R.L 群では 74%, 92%, 59% と急峻で、第 1 日目より 3 日目までの上昇率、第 3 日目以降の減少率は N 群に比し大で、白血病脾における ⁶⁵Zn-kinetics の活発化を示すものと思われた。以上肝、脾を中心 Zn 代謝について R.L 群、N 群を比較検討し両群に相異を認めたが、白血病脾における Zn 量の著明な減少、⁶⁵Zn-kinetics の活発化が Rauscher が脾を

target organ としていることと関係があるか否かなどに關しては、今後検討を要するものと思われる。

*

112. 血液疾患における骨髓スキャニング

藤森克彦 倉 尚哉 佐藤道明
刈米重夫 脇坂行一
(京都大学 第1内科)

細網系細胞のコロイド摂取能を応用し、放射性コロイドを用いて骨髓を描出することができる。われわれは ^{99m}Tc 硫黄コロイドを作製して静注し、シンチレーションカメラにより骨髓スキャニングを行なった。その方法につき基礎的吟味を行ない、血液疾患における若干の症例について骨髓の分布と Ferrokinetics による造血能とを比較検討した。^{99m}Tc 硫黄コロイドの製法は Nelp らの方法に準じて行なった。コロイドの産生率を上昇ペーパークロマトグラム法により算出すると約 90% であった。rat 静注後、臓器分布をみると肝に 70% 以上、骨髓では 15~20% の摂取率を示した。血中からのクリアランスはおよそ 3 つの exponential curve に分析できる。第一次相は $t^{1/2} = 1 \sim 3$ 分と速く、10 分後には投与量の約 10% しか血中に存在しない。尿中排泄量は 24 時間で 4% 以下であった。線および点ファントムによりシンチレーションカメラの解像力をみると 1.5cm 間隔より識別可能である。シンチカメラとシンチスキャナーとで骨盤部をスキャンし、その骨髓描出像を比較すると前者が、細部の判別、濃淡の差において秀れていた。描出は ^{99m}Tc 硫黄コロイド 5mCi 静注 30 分後より骨盤部、四肢、軀幹部、頭部の順に腹背方向より実施した。正常例では骨盤を形成する諸骨、大腿骨上部、上腕骨上部が明瞭に描出される。軀幹部では肝と脾、頭部では唾液腺の像に妨げられるが胸骨、頭頂部に活性を認めた。骨盤部を 1600 channel 記憶装置で 40×40 matrix に区分して activity の分布をみると腰椎下部、仙骨、股関節部にもっとも高い activity があり、これら相互の関係がより明瞭となった。慢性骨髓性白血病例では大腿骨全域、下腿骨上部、さらには踵骨にまでと拡張像が認められた。低形成性貧血例では全体に activity 低く骨盤部は正常な骨盤の形態を示していない。また鉄代謝所見の仙骨部低活性に一致して仙骨の描出が認められなかった。以上のように疾患により特徴ある骨髓分布を示し血液疾患診断に有力な情報を加えるものと考える。

追加：飯尾正宏（東京大学 上田内科）

1) 私ども家兔を用い ¹¹³In-Fe colloid による骨髓ス